様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　24　年　6　月　6　日現在

機関番号：17104
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2009～2011
課題番号：21500565
研究課題名（和文）　スポーツ行動の動機づけと自己観に関する国際比較

研究課題名（英文）　International comparison concerning motivation for sports behavior and self-image

研究代表者
磯貝　浩久（ISOGAI HIROHISA）
九州工業大学・大学院情報工学研究院・准教授
研究者番号：70223055

研究成果の概要（和文）：本研究は、スポーツ競技者を対象とした国際比較から、各国でスポーツ行動、動機づけ、自己観の関連のダイナミズムについて検討し、その比較を通して日本人競技者の動機づけと自己観の特徴を明らかにすることを目的とした。欧米とアジア４カ国の学生競技者の適応的スポーツ行動、目標志向性及び他者志向的動機、文化的自己観の関係を検討したところ、自己の捉え方がスポーツの動機づけに影響を及ぼし、スポーツ行動が異なるという関係が大枠で示された。さらに、その関係性のあり方が各国で相違することが示され、日本人競技者の特徴も浮き彫りにされた。

研究成果の概要（英文）：This study examined the dynamism concerning sports behavior, motivation, and self-image of each country from an international comparison targeting sports competitors with the purpose of clarifying the characteristics of the motivation and self-image of Japanese competitors through the comparison. Upon examining the relationship between adaptive sports behavior, target orientation, motivation of orientation towards others, and cultural self-image of student competitors from 4 countries in the West and Asia, the way of viewing oneself was shown to have an impact on motivation for sports behavior, and a relationship of differences in sports behavior was broadly indicated. Furthermore, these relationships were shown to be different for each country, and the characteristics of Japanese competitors became apparent.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	1,700,000	510,000	2,210,000
2010 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2011 年度	600,000	180,000	780,000
年度	0	0	0
年度	0	0	0
総　計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：総合領域
科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学・身体教育学
キーワード：スポーツ行動、動機づけ、文化的自己観、国際比較

１．研究開始当初の背景

わが国のスポーツへの参加、継続、離脱などの問題は、欧米で発展した動機づけ理論を基にして検討されてきたが、一方でスポーツの持つ意味や価値、動機づけのあり方は個人の所属する文化によって異なることが指摘されている(Duda and Allison, 1990)。多くの比較文化的研究が行われたが、なぜ相違するのかの解釈が十分でないという問題が見られた。そして、動機づけと関係すると思われる文化的変数を明確にして研究する重要性が指摘されている（Duda and Hayashi, 1998)。特に、文化における自己の捉え方が動機づけに大きく関わるとされる。Markus & Kitayama(1991)は、文化的自己観の概念を示し、欧米文化では相互独立的自己観が優勢で、東洋文化では相互強調的自己観が優勢であると指摘した。磯貝 (2000)は文献レビューから、文化的自己観の考え方を基本としてスポーツへの動機づけとスポーツ行動に関する概念モデルを示した。また、Isogai et al.(2003)は、日本と米国の達成目標の相違について検討し、自己観を考慮に入れた動機づけとスポーツ行動の実証的研究の必要性を指摘している。

２．研究の目的

本研究では、文化的自己観（相互協調的自己観・相互独立的自己観)、スポーツ場面の動機づけ　（達成目標、自己決定、原因帰属等)、スポーツ行動（競技への取り組み方、監督やチームメートとの関係等）の関係性を国際比較により検討する。本研究の目的は、日本、中国、アメリカ、イギリスの学生スポーツ競技者を対象として、各国でスポーツ行動、動機づけ、自己観の関連のダイナミズムについて検討し、その比較を通して日本人競技者の動機づけと自己観の特徴を明らかにすることである。

３．研究の方法

(1)スポーツ行動、動機づけ、自己観に関する国内外の文献研究を行う。

(2)日本、中国、米国、英国の学生競技者のスポーツ活動の実態の視察、およびインタビューを通して、スポーツ行動や動機づけの共通点・相違点を質的側面から評価する。

(3)自己決定理論、達成目標、目標志向性等の動機づけ理論、文化的自己観などの概念を基本として量的評価方法を確立する。

(4)各国の学生競技者の自己観、動機づけ、スポーツ行動について、定量的方法で比較する。その関係について共分散構造分析などを用いて検討する。

(5)自己観、動機づけ、スポーツ行動の関係についてのモデルを共分散構造分析などの手法から構築する。

４．研究成果

（１）文献検討と尺度選択

文献の検討：動機づけ、自己観、スポーツ行動、異文化間心理学などをキーワードとして、文献を整理した。そして一部を展望論文としてまとめた。

尺度の選択：文献の整理を通して、動機づけ、自己観、スポーツ行動に関わる評価尺度を決定した。動機づけに関しては、スポーツ場面で練習課題などを重視する課題志向性、他者との比較を重視する自我志向性を評価する尺度、スポーツにおいて自己実現など個人の内的適応を重視する個人志向性、チームメートとの関係など集団への適応を重視する社会志向性を取り上げることとした。また、日本では、他者への期待に応えるといった他者志向的動機が高いことが指摘されていることから、スポーツ場面で他者志向的動機を評価する尺度を作成して比較することとした。自己観については、文化心理学で強調されている文化的自己観に関する理論と評価尺度を用いることとした。文化的自己観は、他者との関係のなかで自己を定義する相互協調的自己観と、他者とは独立して自己を捉える相互独立的自己観に分類される。スポーツ行動については、スポーツ競技への取り組みをスポーツコミットメントという観点から評価し、またスポーツ集団への適応について評価することとした。

（２）視察とインタビュー
　競技者の活動実態：アメリカ、中国、イギリス、日本のスポーツ活動の視察とスポーツ心理学者との意見交換を行った。
アメリカを訪問して、Hoffner氏を通してスポーツ行動や動機づけに関する実態を把握した。香港を訪問してGangyan Gi氏と、イギリスではHall氏と活動実態に関する意見交換を行った。日本では、2人のスポーツ心理学者からスポーツ行動と動機づけに関する意見を収集した。また、4カ国のスポーツ活動を視察してスポーツ行動の特徴や動機づけのあり方を質的な側面から把握した。具体的な特徴として、欧米のスポーツ選手は自律的、自発的にスポーツに取り組む傾向が強く、日本や中国では指導者やチームメートとの関係を考慮した取り組みが多いことがあげられる。

（３）動機づけ、自己観、スポーツ行動の定量的比較
１）動機づけ要因として取り上げたスポーツにおける課題・自我志向性と個人・社会志向性という2つの目標志向性の比較をした結果、国により目標志向性のあり方が異なることが示された。特徴的な点として、日本人選手は、自我志向性と個人志向生が他の国の選手よりも高いことが示された。

２）スポーツ活動への適応やコミットメントなどのスポーツ行動を比較した結果、スポーツのコミットメントの程度が異なるなど各国で特徴ある傾向が示された。日本人選手の適応やコミットメントは高い傾向にあった。

３）従来は、欧米は相互独立的自己観で、アシアは相互協調的自己観であるという前提で研究が行われているが、本研究では文化的自己観を定量的に評価した。文化的自己観について比較した結果、相互協調的自己観の高い国や相互独立的自己観の高い国などがみられ、各国の自己観の特徴が示された。具体的な特徴としては、日本や中国のスポーツ選手は相互協調的自己観が高い傾向にあり、欧米では相互独立的自己観が高い傾向にあった。定量的に評価した結果も従来の分類枠組み同様であることが確認された。

４）動機づけ、自己観、スポーツ行動の関係性の検討とモデルの構築
スポーツ行動、動機づけ、自己観の関係性について検討したところ、自己のあり方がスポーツの動機づけに影響してスポーツ行動が異なるという関係が示され、さらにその関係のあり方が欧米とアジアの各国で相違することが明らかになった。その結果は、図のようにまとめられた。

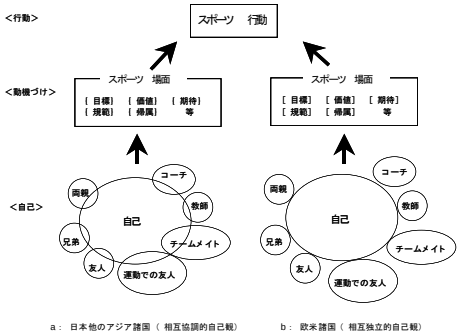

図　本研究の概念モデル

　本研究から、目標志向性などのスポーツの動機づけ要因は、相互協調的自己・相互独立的自己観といった文化的に規定される自己のあり方の影響を受けて、スポーツ行動を決定しているという図式が明らかにされたと考えられる。
日本人選手特徴としては、監督・コーチ等の指導者、チームメート、両親などの重要な他者の影響をより強く自己に内面化しており、その自己のあり方によって、スポーツ場面での達成目標が異なってきて、その結果スポーツへのコミットメントが高まるなどスポーツ行動が相違することが示された。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）
西田保、磯貝浩久、北村勝朗、杉山佳生、伊藤豊彦：「スポーツ動機づけの異文化間研究に向けて」総合保健体育学 32 巻 1 号. 31-40,2009.査読無し

〔学会発表〕（計１件）
Hirohisa Isogai, Jennifer Etnier, Britton Brewer, Allen Cornelius, and Mikio Tokunaga. Do cultural differences exist in sport attributinal styles?: A comparison of American and Japanese physical education students. The 6th Asian South Pacific Association of Sport Psychology Congress, 2011,11,11,Taipei, Taiwan.査読あり

〔図書〕（計１件）
磯貝浩久「動機づけ雰囲気」「達成目標理論」「自己決定理論」「原因帰属理論」中込四郎、

伊藤豊彦、山本裕二編著、よくわかるスポーツ心理学、ミネルヴァ書房、pp76-77,pp80-83,pp84-85,pp90-91,
2012.3.10.

６．研究組織

(1)研究代表者

磯貝　浩久（Isogai Hirohisa）
九州工業大学・大学院情報工学研究院・准教授
研究者番号：70223055

(2)研究分担者

西田　保（Nishida Tamotsu）
名古屋大学・総合保健体育科学センター・教授
研究者番号：60126886